

……選手を迎え入れる施設が続々と建ってゆく裏には、貧困、裸足の人びと、栄養失調で腹の膨れた子どもたち、食べるに事欠く農民たち、これまでもこれからも忘れられた人びとにとって敵対的な社会とそれを横切る階級間の深い溝、どんな見せかけでも取り繕うつもり政府の残忍さが隠れていた。メキシコは模範的国家であり、ラテンアメリカの未来はひたすらわが国の進歩と安定にかかっているのだ——朕は政府なりのPRI=政府は世界にそう示さんとしていた。第十九回オリンピック大会にどれほど莫大な費用をつぎ込もうとも、いずれは我々の利益に適うのだ。なぜなら賃金を大事にしたい投資家は、「信頼できる安定した国」としてメキシコを選んでくれるはずだから。ところが……

オリンピックはいらない！革命を望む！オリンピックはいらない！革命を望む！

ああ、何と愛国心のないうえに、妨害ばかりする青二才ども！ 学生蜂起の続いた一四六日間は熱く烈しい日々だった。蜂起に参加した者たちはその日々を決して忘れはしまい。

(略)

逮捕や投獄にもかかわらず高まっていた学生たちの達成感は、一九六八年十月二日午後六時十分、三文化広場に潰える。そのとき、銃撃の雨が降り始め、二百五十名以上が死亡したのである。

※PRI (Partido Revolucionario Institucional) : 制度的革命党。1929年、メキシコ革命の成果を制度化し、様々な革命勢力を結合する目的で結党された国民革命党が1946年に解明したもの。1929年から2000年まで政権与党。2012年に与党に返り咲き。

出典：エレナ・ポニアトウスカ「事件後三十年に寄せて 汚辱の歴史——
イストリア
 メキシコ一九六八年十月二日、学生二百五十名虐殺の物語」、エレナ・ポニアトウスカ著、オクタビオ・パス序、北條ゆかり訳「トラテロルコの夜」、藤原書店、2005年。

